

ガイドラインをさらに検討し、造血幹細胞移植のチーム医療の場において活用していく予定である。

演題3. ベトナム医療援助への参加経験
—ベトナムの口唇口蓋裂治療の現状について—

○飯島 伸, 杉山 芳樹

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

近年のベトナム社会主義共和国の経済発展が著しい。現在は人口8400万人増加率は1.2%で、毎年100万人増加している。GDP成長率は8.5%で右肩上がりの発展を見せている。そして、各医療現場も発展している。一方、口腔外科医不足や患者の経済的理由から口唇口蓋裂治療体制の整備は先進国に比べ十分とはいえない。そこで、日本口唇口蓋裂協会では、外務省の日本NGO支援無償資金協力事業として、同国に対し医療者を派遣し、口唇口蓋裂などの先天的口腔疾患への医療活動、技術指導を行っている。今回、同協会の依頼で平成19年1月16日から27日、11月27日から12月6日に、ホーチミン市、ファンティエット市およびチャービン省で医療活動を行ってきたので、その概要を報告した。

今回は私が合流した東京歯科大学チームとカナダDALHOUSIE大学チームの二チームで医療活動を行った。

スケジュールは各病院4日間で初日が回診、手術予定の立案、オペレーターの決定などを行った。2日目から4日目にかけて手術を行った。一日9例程度の口唇口蓋裂手術を行った。のべ4つの施設で行ったので、100例程度の手術を行ってきた。この二回のミッションでは、事故もなくすべての手術が順調に行われ、結果的にも満足がいくものとなった。

今後もミッション参加を続け、将来的には岩手医科大学歯学部でチームを組み独自チームとして参加することが望まれる。

演題4. メラニン色素沈着を伴った扁平上皮癌の二例
: 免疫組織学的分析

○三上 俊成, 笹森 傑*, 古内 秀幸*,
杉山 芳樹*, 武田 泰典

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座, 口腔外科学第二講座*

緒言: メラニン色素の沈着を伴った扁平上皮癌の二例を経験したので組織学的分析を加えて報告する。また、悪性黒色腫で発現している癌抑制遺伝子 Wt1 (Wilms' tumor 1) の免疫染色法を用いた認識で、メラニン沈着を伴った扁平上皮癌と悪性黒色腫との鑑別が可能か否か検討を行った。

症例1: 患者は49歳女性で主訴は口底部の腫瘤。色素沈着とピラン、発赤を伴っていたが、明らかな腫瘤や硬結は認めなかった。検査所見で特記すべき所見はなく、臨床診断は色素沈着の疑いだった。組織学的所見では著しく異形を呈した腫瘍細胞と色素含有細胞が混在していた。特殊染色により色素はメラニンと同定され、腫瘍細胞に混じってメラノサイトが増殖していた。病理診断は色素沈着を伴った扁平上皮癌であった。

症例2: 患者は40歳男性で、主訴は舌のびらん。左側舌縁部にびらんを認め、硬結を触知した。Ga シンチで舌に異常集積がみられ、臨床診断は舌癌だった。臨床的な色素沈着はなかった。組織学的所見では粘膜上皮に色素沈着はなかったが、浸潤した腫瘍胞巣内に著しい色素沈着を認めた。特殊染色により色素はメラニンと同定され、腫瘍細胞に混じってメラノサイトが増殖していた。病理診断は色素沈着を伴った扁平上皮癌であった。

悪性黒色腫で発現している癌抑制遺伝子 Wt1 で免疫染色を行ったところ、悪性黒色腫の標本では陽性を示したが、本症例ではいずれも陰性であった。

結論: 色素沈着を伴った扁平上皮癌の二例で、腫瘍細胞に取り込まれたメラニン色素の沈着が明らかになり、メラニンの分布は病変部に限局していた。悪性黒色腫もメラニン沈着を伴った扁平上皮癌も、ともにメラノサイトの増殖をみる悪性腫瘍であるが、癌抑制遺伝子である Wt1 はポジティブコントロールの悪性黒色腫でのみ強く発現していた。Wt1 による免疫染色は悪性黒色腫および色素沈着を伴った扁平上皮癌の鑑別に有用であることが示唆された。